

# 高機能広汎性発達障害の学生に対する学生相談室の支援活動--アスペルガー障害の学生にとっての友人関係の意味について

著者	中島 暢美
雑誌名	神戸山手大学紀要
号	9
ページ	29-41
発行年	2007-12-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000724/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000724/</a>

# 高機能広汎性発達障害の学生に対する学生相談室の支援活動

—アスペルガー障害の学生にとっての友人関係の意味について—

中 島 暢 美

キーワード：高機能広汎性発達障害、アスペルガー症候群、学生相談、友人関係

## 要 約：

本論文は、高機能広汎性発達障害の学生に対する学生相談室の支援活動についての継続事例研究である。アスペルガー障害の学生の学生生活に貢献した友人関係に焦点を当て、友人関係が高機能広汎性発達障害の学生や彼らを支援する学生相談にとってどのような意味を成すのかを以下のように考察した。彼らの友人関係は、①同輩集団の“素朴な柔軟性”によって育まれる、②関係が親密になるほど基本的な対人関係の障害が顕著になる、③インターネット上でも繰り広げられる、④学生相談で後方支援していくことが重要である。

## I はじめに

筆者は、これまでアスペルガー障害（またはアスペルガー症候群, Asperger syndrome:以下ではASと表記する）の学生に対する学生相談の支援活動を報告してきた。本稿は、「高機能広汎性発達障害の学生に対する学内支援活動—アスペルガー障害の学生の一事例より—」（中島, 2003）、「高機能広汎性発達障害の学生に対する学生相談室の支援活動—アスペルガー障害の学生に対する教育的面接過程—」（中島, 2005）に続く研究報告（6期）である。筆者が報告してきた事例研究は、言うなれば、ASの学生の“人となり”を理解すべく臨床という奮闘である。全く予期せず現れたASの学生と、関わらざるを得なくなった筆者とのまさに思考錯誤の面接過程である。しかしながら、当然のことではあるが、その周囲には家族や教員等大学関係者、更には、ASの学生を取り巻く友人らが存在していた。本事例のクライアント（以下ではCIと表記する）は、大学内でのクラブ活動（以下では部活と表記する）という現実世界と、インターネットという仮想世界において友人関係を築いていた。

本稿では、ASの学生の学生生活に貢献したと思われる友人関係に焦点を当て、友人関係が高機能広汎性発達障害（High-functioning pervasive developmental disorder:以下HFPDDと表記する）の学生や彼らを支援する学生相談にとってどのような意味を成すのかを考察する。

## Ⅱ 第1～5期までの事例の概要

CIは来談時1回生(18歳)の女子学生であった。主訴は「自分の治すべきところについて」考えたいとし、「最近是人と上手く話したり親しい間柄になるにはどうすればいいか考えている」(中島,2003, p130)と言う。CIは面接中に居眠りをしたり、その話し方は固く形式的で繰り返しが多かったりと奇妙な印象を与えた。学生相談室カウンセラー(以下ではCoと表記する)は、CIの了解を得て、CIと母親に病院での検査と適切な治療の必要性を説明した。CIは病院で人格障害と診断され、薬物療法と学生相談での1回50分の面接を隔週1回行うことを取り決めた。「人と行動するのが苦手」だが「親が理解してくれない」こと、アルバイトの面接で不採用が続いたこと、インターネットに傾倒していること、軽音部に入部し、そこでは「ある部分は主張してある部分は皆とやると、バランスをとっている人が多い」(中島,2003, p131)ことなどが話された。しかし、面接は無断キャンセルが続き、CIは出席日数不足で留年した。そこでまず、Coは、親面接を行い、新たに学生相談室の校医となった精神科医の診断を受けるよう説得した。CIはASと診断された。CoはCIの両親の同伴面接で了解を得て、チューターの教員と連携しつつ、学科内支援の要請に奔走し、「大学内連携」<sup>キャンパスネットワーク</sup>でCIを支援する環境を整えた(中島,2003)。

次に、Coは、CIにとっては大学生活での具体的問題解決が最重要課題と考えた。Coは面接で「Coが面接での会話を紙に書きCIに即座に読ませる“視覚的手がかり”」と「ストーリー化された8つの状況のニュアンスを、CIがどう捉えるか、どのような『基準』によって判断するかを知る」ために「デューイの“社会的常識テスト”(Frith,1991)」を活用した「教育的面接」を実施した。“社会的常識テスト”のストーリーをCIの日常生活に置き換えて質問し、話し合い、CIが日常生活で取り入れ易い具体案を提示し、それらを“視覚的手がかり”で定着させる作業を行った。CIは「なんかクイズみたい」(中島,2005, p227)と楽しみするようになった。この作業過程<sup>ワークプロセス</sup>は情緒安定や自己統制を図るだけでなく、不適応行動とは別の表現方法をCIに“教育”し、CIの問題は徐々に軽減した(中島,2005)。そのような中で、CIは部活(中島,2003, p131)、インターネット・ゲームの作成(中島,2005, p227)やチャットに熱中していった。

## Ⅲ 面接の経過

(CIの発言を「」、Coの発言を<>、視覚的手がかりを[ ]と表記する)

第6期 #46～59 (X+3年10月～X+4年4月)

#46、CIは、軽音部のバンド・メンバーのZ君に対して、テレビで暴力関連のニュースが流れ「チャンネル替えてくれない」と急に「キレた」り、駅に設置されていた虐待の冊子の内容に激昂し(中島,2005, p225)、「あんた、これ見てどう思う」と怒鳴ったりした事を話す。Z君は、いつも何が何だか「わけわからん」と恍けた反応をすると言う。Coは思わず笑ってしまい、CIも笑っていた。なぜZ君が標的なのか尋ねると、CIは一番喋り易いと言うものの、わからないと赤面する。CoがZ君に同情すると、「ふふ～ん」と鼻にかかって色っぽい、甘えるような声を出したの

でCoは驚愕した。[Z君にはキレると当たり易いのですね]と“視覚的手がかり”を提示すると、CIは頭を抱えて身体を前後に揺すり大笑いする。

#47～50、CIは「忘れるといけないから」と保健室に伝言を残していた。その内容は、図書館で数人に囲まれて歌うよう強制されたというものだった。Coはそんな学生が大学にいるのかと落胆したが、それは中学の時の事であることが面接でわかる。親しげに話しかけられ、「つい友達みたいに思って」歌ったと言う。CIは、このような対人関係の失敗を母親に告げる度に「態度や口のきき方が悪いから」と叱責されていた。「普通の子になりたくてもなれなかった私のこともわからず」と大声で3回反復し、Coはそれを“視覚的手がかり”に提示した。CIは、大学までなかった愛称ニックネームで呼ばれることがとても嬉しそうだった。Z君の話題が上ると非常に照れて大袈裟な動作になり、「恥ずかしい」と言いながら、Z君とのメール内容やバンド・メンバーのN君、H子、Z君と一緒に撮った写真を見せてくれた。N君とH子は恋人同志なので、N君とは「一線引いている」と言う。N君は、最近ファッショナブルになったCIを「可愛い」と言ったり、「積極的に口をきかない方がよい」と助言したり、「お前本当に人の気持ち考えられるようになったな」と誉めたりする、CIの良き理解者のようだった。このように、CIは遂に念願の友人を得たと思われたが、「皆が合わせてくれているだけで、自分1人が喜んでいるだけなのかもしれない」という疑念を振り払えないでいた。この頃のCIは次の面接まで待つことが難しく再三来室し、Coが面接以外では話せないと告げるも全く耳に入らないようだった。

#51、CIは予約時間以外に来室し、泣きそうな顔で「一体いつ話しが出来るんですか」と弱々しく訴えた。Coは面接で聞くと繰り返した。面接では、CIは待たされた恨みを吐き出すかのように大声で叫んだ。あまりに激しかったので、怒っているのか尋ねると「怒っていません」と怒鳴り返された。話の内容は、今迄は友達に嫌われたら諦めるしかなかった、相手の好みの人間にはなれない、変え難いものを変えようとするほど辛いものはない、というものだった。それらの背後にはZ君の留学に対する寂しさを扱いきれないCIの葛藤が見え隠れしていた。

一方、CIは自身のホームページや、インターネット・ゲームの作成を通じて知り合った様々な人とチャットを行うようになっていた。「インターネット・ゲームをライフ・ワークとする」ASの人が、冗談が全く通じず、場の空気が読めない、生きにくいといった、CIと同じ経験をしていると話す。CIは、そこで「どうしたら人から好かれるようになりますか」と質問を投げかけていた。

#52、CIは、「関係のない話しをしたから」N君に黙るよう注意されたと理解し、N君の助言どおり「聞き上手に徹するのも方法」と考えていた。Coに相談したかった事は「ルールを守っているうちに自己解決できた」らしく、「自分からは近づこうとは思わない」が、「好意的な人は大事にする」と言うCIは、部活の後輩のR子に相談にのってもらっていた。

#53、Coが、＜友人が暗い表情のときに、タイミング良く「どうしたの」と声をかける＞練習に誘うと、「今までやったことないのに、いくぶん奇妙に思われる」と拒否する。＜だからタイミング良く＞。「無理」。Coは＜一度やってみましょう＞と促した。CIがぎこちなく「どうしたの」と始めたので、次に続く言葉を尋ねると「こんにちは」と言う。＜それは…おかしい＞とCoが言

うと、「何かあったの」と言い直した。何度か練習すると、一つの型は出来るようになり、Coが「お腹が痛いの」と言ってみると、「お大事に」と返してきた。Coが、相手が避けている場合は声をかけないこともあると言うと、CIは自分のことだと解釈する。Coが、「それは今までやってないから」と代弁すると、「そう、それが大きい。大体自分は人が沈んでいるときは放っておく。自分も話しかけられても応えられないときもある」と言う。CIは、アルバイト2回目で出勤日を忘れて解雇されていた。N君には「接客業のタイプちがう」と反対され、Z君にも「キツイんじゃない、失敗してへこむんじゃない」と予言されていたと言う。「今までそうだったから、わかっている。徹底的にへこんで反応しないときがあった」。N君は、「次では上手くいくかもしれない。次もダメでもまた次に行ってみる。チャレンジし続けることが大事」と励ましてくれたと言う。Coは、後輩のR子の「バイト料貰ったら皆で食べに行きましょうよ」という誘いには「奢って下さい」というニュアンスがあると説明した。CIは表情を少し曇らせ、「自分はそのつもりだったから」と言う。CIが「どうしたら人から好かれるようになりますか」と尋ねた答えの一つとして、Coは「自分が働いたお金で友人に何かしてあげようとする優しい心を大切にしてください」と伝えた。面接後、Coが最寄駅に着くとCIが突然目の前に現れた。偶然を装う態度がいかに不自然で待っていたのは明らかだったが、Coにはいじらしく感じられた。CIは電車の中でZ君の留学やバンドメンバーの卒業について話した。Coが「大学の友人は一生の友人、また会える」と言うと言った「離れたらもう終わりと思っていた」と呟く。

CIはネット上の友人らとのメール内容を持参していた。そこには、バンドのライブの様子とZ君への思いが綴られていた。

「私は可愛いキーボードのお姉さん。迷いも忘れて笑顔をふりまいていました。私がこれだけ認められてるんだって感動しました。ライブのMCで『Z君と結婚することになりました。でも実際に結婚するのは10年先でその間にいろいろ起こるだろうなと不安です』と笑顔で冗談を言ってみたりもできました」。

打ち上げではプレゼント交換があり、CIはZ君がいつも着けているようなバンダナを用意していた。後輩にそれが渡ると「Z君のみたいでしょ」と自ら告げ、「今まで人にあげた中で一番いいと思ったプレゼントかもしれない」と満足していた。

二次会では、Z君が「バーに行くと言ったら『私も』と言ってみたり」していると、「『カラオケ行くと行ったらお前もカラオケいくのか』聞かれました。本心は彼と一緒にいたかったんです。『俺と一緒にカラオケに行くか』と言ってきて嬉しかった。ちょっと距離をおいてみたのがうまくいったのかな？一次会でそんなに喋らなかったし。カラオケでも彼と離れた場所に座って楽しく過ごせました」と納得していた。

「今までは、彼が私のことを譲ってくれてたみたいだった。これからはそれが当たり前と思ってたから、彼がいなくなったときとまどってしまうだろうな。来年からは、私のことを譲ってくれる彼はもういない。だから今のうちから、彼のもとから少しずつ自立していかないとけない。すぐ

く辛いです。今まで自分を支えていたものが崩れることは。私はもっと強くなれないといけな  
かな？ライブの時の彼はとても素敵でした。もうそれは恋とかじゃなくて、純粹にそう思いました。  
会ったこともない遠い世界の憧れの人よりも、今、近くで一緒にやっている人の方がずっと印象的  
に思える、そう思うべきものかもしれないです。ライブの時の私も、みんなからそう思ってもらえ  
たのかもしれない」(傍点筆者)。

また、CIは精神障害のメル友へ自分の障害を告白していた。

「よきネット仲間と信頼して。私はアスペルガー障害の可能性が高いことがわかりました。相手  
の気持ちを読むことができず、とんでもない迷惑をかけることが多いのです。普通、相手の言った  
ことは、言葉の意味だけでなく場の空気を読んで判断するものですが、私の場合は言葉の直接的な  
意味だけで判断してしまうようです。私の辿ってきた道…太く短い対人関係しか築けない、中高生  
の時周囲からうざがられた、それがフラッシュバックして机を叩いたり大声を出して周囲に迷惑、  
声のボリューム調節ができない、独り言が多い。今も言っています(笑)。時事問題や教育関係の  
本を好み、人間関係が複雑な小説はまるで理解できない…。障害のことは、本来なら家族にも理解  
してもらいべきですが、とくに母親には一向に理解してもらえません。一方的に悪いと決めつけて  
しまい、理解しようとはしているのですが、その努力の仕方が適切でなく見当はずれな方向で、  
本人もそれに気づいていないんだと思います。普通の付き合いができないのは性格がわがままだから  
と言われ続け、私は直そうとしても直せなかったのです。その経験(変えようとしているのに変  
え方がわからなかったそのことを理解してくれなかったという憤慨)がトラウマになっているので  
しょう。今でも母親から対人関係のことで批判されると、本人にそのつもりがなくても、私には自  
分の性格に落ち度があることを指摘されたように思えるのでしょう。最近は必ず喧嘩になるので話  
すのはできるだけ避けるようにしています。親に理解を求めても、理解してもらえない場合はあき  
らめた方がいいと思います。理解してくれる人がいれば、それで十分だと思います。友達には障害  
のことは話していません。友達に私がそういう障害だと言ってもたぶん信じないでしょう。専門家  
でもない私が、普通の人に対して理解や支援を強制するのともうかと思うので。私の障害は完全  
に治す方法は見つかっていませんが、ただ、訓練で社会性を普通の人と同じ水準にまで引き上げるこ  
とはできるようです。私は、訓練で普通の生活が出来るようになろうと努力しています。背景は違  
うけれど、私はあなたに対し、互いの立場に共感しています」。

#54、Coが精神障害のメル友へのメールの最後の文に感動したことを伝え、CIは照れ笑い  
する。「訓練で普通の生活が出来るよう」努力しているCIに、<あなたがそうなればいいなあ>  
と言うと「自分もそうになりたい」と返した。CIは家族に独語を嫌悪されていた。「共感」については、  
「親が理解してくれないという、その辺の共感」と答え、母親には「もう理解してもらう必要はない」  
と言う。CIは、授業中に暴力関連のビデオを観てフラッシュバックした事を話す。「強烈な不

快感」から凄じ剣幕で怒鳴り、「そこに飛んできた虫をバーンと机に叩き潰した」。Z君とH子が同じ授業だったので、H子が心配して声をかけてくれたと言う。Z君が留学したら会えないと嘆くので、Coが留学する前にZ君の実家に会いに行く提案をすると、「ははは（笑）。そこまではしない。えっ、行って何するんですか」と聞く。Coは応えに窮し、CIはロッキング<sup>\*)</sup>を続けた。

#55、CIは「一つのことに集中すると周りが見えない」と笑いながら話す。「人に何かすると恩着せがましいように見えるらしい。世話になってるから、お菓子を買ってきてもらってもそう言われる。人気取りのためにやってるわけじゃない」。＜あなたはそんなこと考えないでしょ＞。「考えへん。ははは（笑）。タイミングが悪いのかなあ」。その後、ゲーム用に書いた物語の主人公がZ君に似てしまった話を繰り返した。

#56～57、CIは部活の仲間との旅行、卒業式の後の打ち上げや合宿の話をするが、ロッキングや独語を頻発した。Coには、肝心なことを上手く言語化出来ずにいるCIのもどかしさを感じ取られ、＜どうしたの。話し難いの＞と尋ねるも、CIはうっすらと笑みを浮かべたまま無言でロッキングを続けた。

#58、CIが遅刻したので面接は出来ず。「いつ出来るんですか」と攻撃的口調で訴えるCIに、＜何で怒るの＞と返すと、少し驚いて、やや平坦な口調で言い直した。

CIはチャット記録を持参していた。

「今の友達は、私のことをなんでもかわからないけど面白い奴だと思ってくれてるみたいです。私のできること苦手なことを、私から言わなくても何となく理解してくれていると思う。察することのできる大人なんだなって。一緒にいてくれるから、『ありがとう』って思います。裏切られたこともあったから、友達と友達でない人の区別がつきに＜＞なってきた。それって、いいのか、悪いのかな？自分の中では普通に自分の意思通りのことをやっても、それが周りには『ツボにはまる』みたい。私がステージに立つと、それだけで人を楽しませてくれる、というそうです。普段そんなに周囲のことを考えているわけじゃないのに。冗談ばかり言ってあんまり真面目に考えてそうにない人は自分と違って気楽でいいな、と思ったりもする。私は冗談があまり通じないところがあって、友達に冗談で言われたことでも本気にして落ち込んだり、疑ったりしてしまう。正直、今の友達のことは最初疑ってた。親しくても、何でも本音を言い合えばいいってわけじゃないし。心の底から信頼できる、って言ってもどういう状態を指すのかよくわからないけど、『お前本当に人の気持ち考えられるようになったな』と言われるようになって嬉しいです。私にも、自分の悪いところを言ってくれる友達、いますよ。昔の友達は、私が世話を焼かせるのが手におえなくなて離れていってしまった。関係を修復しようとしたけど、『貴方が変わるのなら』みたいなことを言われ、変わろうとしたけど変われなかった。性格って根本的に変わらないから、私は誰かの面倒をよく見る人間には一生なれないかもしれない。強く信頼されようと努力するとつらいかも。何度もかけられた信用を裏切ってしまった…。大したことはできないけど、ちょっとぐらいは友達のために役にたとうと思う。人に感謝するっていう気持ちをわすれないでいたい。

私も頼られる人になりたいです。カウンセリングの先生は、とても私の問題を理解してくれていると思います。性格にコンプレックス持って、それを誰にも理解してもらえずにいた時期はあったし。もちろんカウンセリングの先生ばかりでなく、友達の方が理解してくれる部分もあるし、親の方が理解してくれる場合もある」(傍点筆者)。

#59、CIは合宿もライブも周囲は後輩ばかりだったと話す、引退を考えてはいなかった。Z君がライブを見に来ていて後輩に胴上げされたこと、Z君からライブの感想メールが来たこと、その返事を書くために後輩のR子に相談にのってもらったことを満面の笑みで話した。しかし、「もう会う事は無いと思う」と、CIの気持ちは就職活動に向き始めていた。

#### IV 考察

##### 1. 青年期のHFPDDについて

青年期のHFPDDの特徴は、「対人関係に必要な他者への配慮の欠落」(杉山ら,1999)、すなわち社会性の障害である。彼らは遅蒔きながらも、年齢を重ね社会経験を積み、独自の仕方に対人関係を持ち社会的文脈も読めるようになる。そうすると、自分が「変な人」(中島,2005, p228)と評価されることを知るだけでは済まなくなってくる。自分というものが見えて来て、自分ではない他者に気づき、自分と他者との違いや他者から見た自分という今迄と異なる観点から自分を体験し、そのことによって心理的混乱に陥ることさえある。まさに、彼らは年齢相応の人間関係を築くことに労苦を伴う「悩む自閉児」(神野,1987)を体現している。そのような彼らの不適応行動は、過敏性、パニック(＝自分の混乱)等から成る。過敏性は、他者と適切な距離を取り、適応的に行動することを阻む。パニックを客観化することが困難なために、それらを他者と共有することが出来ない。杉山(1992)が、「一義的な問題は自分の客体化の障害」であり、「それゆえに他者の心理の把握にも障害を来している」と指摘するように、非常に純真であるにも関わらず、そういった自分を他者と共有出来ないことが主要な問題といえる。特に、愛着形成不全で自他の重なり合いの体験が不十分(＝超自我が未形成)なことが多いとされる、本事例のCIのような積極奇異型は、衝動的・直接的な行動噴出といった行為障害による適応障害を生じ易いといわれている(杉山,1995)。以上のような社会性の障害は、HFPDDの青年を自己否定に向かわせる。辻井(1996)は、安定した自分を形成し維持するために、「自我支持的」、つまり、本人の出来ていることに焦点を当てるような支援が必要であると述べている。小林ら(1990)は、他者に「認められる存在として自尊心が保たれる」べく配慮が援助者側にあれば、その成長は成人期も着実に続くとしている。杉山ら(1999)は、認めてもらえない状況でも嫌なことが出来るのは、自分を承認してくれる人を取り込んでいる(＝超自我が形成されている)からであり、興味のないことは全くやろうとせず、嫌なことは人の何倍も時間がかかるのは、自分を承認してくれる人を取り込んでいない(＝超自我が未形成である)からだ述べている。従って、よりよい自分を形成していくためには、支持的な精神療法が不可欠だとしている。



中島(2005)は、ASのCIに対して「教育的面接」を施した。それは、「CI当人にとって“わかり易い”コミュニケーション活動をカウンセリングにおけるCIとCoの(日常的)関係の中で習得」していく支援だった。そもそも、教育は個人の発達の援助である。それは、もはや援助する必要のないジリツした状態まで援助することであり、教育の目的はジリツした人間の形成であるといえる。このジリツには、第1に、他者の力に依らず自ら身を立てる自立がある。一人前、人並みに出来ることである。第2に、自らの行為を規制(コントロール)する自律がある。すべきことはする、すべきでないことはしないという主体的倫理観である。筆者は、HFPDDの青年には、これら二つのジリツが達成されるべく適切な教育的支援が施されなければならないと考えている。学生相談室で出会う彼らは知的障害を伴わず、一般入試を経て入学を果たしている。仮に、第1の自立が“出来る—出来ない”というところで評価されるとするならば、彼らは点数化される学力においては“出来る”人である。学生という立場に限って言えば、その水準での自立は、ある程度あるいは全く可能な人といえる。第2の自律は点数化が困難な“する—しない”ところで評価される。この“する—しない”ところでの評価が、彼らの大学生活を左右する分岐点になっていると思われる。神野(1987)は、自閉児は、人との関係の中で重要な感情や共感を相互に関連しながら行動を変容し、その言語発達は人格発達なくしてはあり得ないとする。岡田(2004)は、「個人の自律性と社会性とは本来は車の車輪のように相補って機能していく」と述べている。自分というものが人との関係の中で現れ、対人関係を前提にしてこそ意味を成すのであれば、この“する—しない”という主体的倫理観、すなわちCIの自律性は、「教育的面接」におけるCI—Co関係の中で多少なりとも育まれていたのではないだろうか。そして、この自分という人間関係機能は、直接的にCIの“人となり”と関わりを持たざるを得ない社会的機能として、CIの友人関係においても育まれていったのではないだろうか。

## 2. 部活という現実世界でのつきあい

### (1) “素朴な柔軟性”の中で

HFPDDの青年は、学力では問題は生じないが一般常識が著しく欠けている。成人期のASは、表面的には適応的だが全体としては自己中心的・孤立的な状態に止まるという(Frith,1991)。彼らは他者と関わりたい意欲は高いものの、自然に他者と関わるのが難しい。自らの発言が場に相応しいか否か気づかなかったり、会話で暗黙のうちに前提にしている「非明示的情報」(石坂,1999)を共有していなかったりするために相互関係の成立に困難を来すのである。

そんなハンディを持ちながらも、CIは大学生活の中で部活という自分の居場所を探し当てていた。CIは多くの時間をバンド・メンバーと共に行動し、「なんだかわからないけど面白い奴」(#58)と、それなりに受け入れられていた。CIは其処で、良くも悪くも若者らしい対応の中で関係を築いていった(#47~50, 52, 53, 55, 56~57)。人の日常的行動は、複雑な物理的・社会的な環境条件下で、言語的・非言語的な行動が複雑に組み込まれた行動連鎖であり、人は対人相互作用の中でそのルールを理解していく(加藤ら, 1991)。CIは認められたい願望から、「変な人」(前掲)だけで

はないことを示すために愛想良く振舞うよう努めた可能性がある。しかしながら、HFPDDの場合、興味がある話題については熱心に語るが、他者の興味に付き合わず、話を聞いていないことが多い(辻井, 1996)。日々のつきあいの中で、<sup>メツギ</sup>鍍金は容易く剥がれ落ちたのか、CIはN君に常時<sup>たしな</sup>窘められていた(#47~50,52)。CIがN君に全く従順だったのは、第1に、N君がCIをよく観て知っており(#47~50,53)、恐らく彼なりにCIの“人となり”を理解しようとしていたこと、第2に、CIに対して友人としてごく自然に接していたこと(#47~50, 53)、第3に、それらがCIにも伝わっていた(#58)ことが推考される。身近に(=身体が近い)接する中で相手をよく知るほど有効な対処法がわかるものである(中島,2006)。N君のみならず、他の友人らもCIの様子を気遣ったり(#46)、パニックになっているCIを心配したり(#54)、相談にのったり(#59)と、CIの世話を焼いて(#58)いた。友人らもCIの問題行動に対して、最初は“引いた”に違いない。しかし、徐々に、CIにそれなりのポジションを与え、CI独特の世界を真っ向から否定することなく、ありのままのCIを受け入れ、自然に接していたのではないだろうか。もはや子どもとは言えないが、未だ部分的には子どもを延引する学生の自然発生的小集団においては、このような“素朴な柔軟性”が見られることがある。また、HFPDDの場合、他者の体験を理解することは難しいが、彼ら自身は様々な体験を経てきている。いじめ体験のトラウマがあるCIは、「同年代の仲間の活動からは、除け者にされていることが身にしみて判って」(Attwood,1998)ただけに疑念もあったようだった(#47~50)。村瀬(1984)は、人は他者や自然を身体を使って関係しながら、「関係の中で生きること」によって成長すると述べている。CIは、後に友人らに対して感謝の気持ちを素直に表現している(#58)。そういうCIの“人となり”も、また、友人らを「察することのできる大人」(#58)にしていたのかもしれない。

このように、CIは入学当初から切望していたこと(中島,2003, p130)を遂に成就したのだが、現実の対人関係はCIには想像も出来なかった苦楽を同時に与えることになった。CIは、中・高でCIなりの社会経験はあった(#53)ものの、基本的な対人関係の発達には遅れを生じざるを得なかったからである。

## (2) 異性に対する感情について

ASの人が異性に対して恋愛感情を持つことがあっても稀有なことではない。例えば、ドナ・ウィリアムス(1992/1993)のように、周囲から奇妙に見える関係でも当事者間で成立しているのなら問題ない。問題になるとすれば、CIのような片想いの場合である。第1に、CIはZ君のことで喜怒哀楽が激しく変化し(#46, 47~50, 51, 54, 56~57)、Z君の話題で過度に興奮する有様は小学校高学年くらいの反応だった。CIにとっては、そうなるだけの十分な理由があったのだろうが、関係を作って巧くやっていくというところでどうしてもハンディがあるのも確かだった。CIは面接初期から比べると思考や感情を随分言語化出来るようになったが、CIにとって新奇で捉え難い思いを言葉にすることには困窮するようだった。それは恋愛感情の芽生えといえなくはないが、普通なら小学生で体験するような事を大学生で体験する、というように時間差が存在するのであ

る。ASの人にとって親密な関係は、その成長に時間を要するのだろう。また、CoがZ君に会いに行く提案をしたときの返答は興味深い(#54)。メンバーの卒業にもあるように(#53)、彼らにとって、どこまでがリアルな生活範囲として捉えられているのかが表われているところではないだろうか。CIは大学生活における部活という場所でZ君と繋がっているのであり、Z君との関係はそこで展開されるべきものであり、従って、その延長線上にない全く別の場所で会う必要性が思い浮かばなかったのかもしれない。第2に、CIは自閉的特徴をZ君に存分に見せ(#46)、それをどう思われているかということは大して気にすることなく、突然、結婚宣言をしたり、周囲にZ君への好意がわかる露骨な言動をしている(#53)。ここでは、彼らの突発的・急激的な接近や過剰行動が関係を保つことを困難にするだけでなく、限りなく自己完結に傾倒する特質が顕著だと思われる。Z君は仲間としてはCIを受け入れていたようだが(#46,53)、CIの歯止めの効かない一方通行的行為には辟易していたことが推測される(#53,54)。能力が高いHFPDDの人でも、ある行動がなぜ受け入れられないかを詳しく説明しても理解出来ないことが多いという(Howlin,1997)。CIはZ君から何かを感じたのか、CIなりの対処はしたようだったが(#53)、拒否される理由はわからずにいたことが推察される。ASの人は、感情を言葉で伝えられてもその意味が理解出来ず、他者の感情を理解しないまま自分の思いが先行して関係を悪化させることもあり得る。異性間に纏わる繊細な感情のやりとりは、最初から相手に伝わると約束されているわけではない。相手を理解したいといった意志を示し続けることで未知の文脈がやりとりされ、互いに浸透するというような場合も多い。CIにおいては、まず、そういった感情のやりとりが、言語・非言語のレベルで欠如しているのだろう。このように、対人関係における適切な距離や間が掴めないHFPDDの特徴は、関係が親密化するほど際立つように思われる。第3に、CIはZ君のことで不安定になると、筆者に対して一方的で強引な行動を続け、面接では不適応行動が頻出した(#47~50,51,53)。しかし、それは、CIが現実世界のつきあいの中で壁に突き当たり、自分を理解してくれるCoとの関係において何とか解決策を見出そうとするCIの成長の過程であると考えられた。「日常的な信頼できる他者との間で関係性を十分に実感できていくための橋渡しの役割を果たす」Coとの『『つながれる』という感覚』は、「青年期以降の彼らのあり方を考える上できわめて重要」(辻井,1996)である。筆者は、CIに具体的な社会的スキルを教え定着させることが必要という考えは変わらなかったが、更に、CIに寄り添い、CIが同輩集団の中で仲間として承認され、ある程度は理解されていることに自信が持てるような支援をすることが肝要だと考えた。ただし、Z君に関しては、第1に、CIにとってZ君という刺激が強過ぎて、過剰反応になるので積極的には話題にしなかった。第2に、「純粋に」(#53)一緒にいたいだけの、未だ恋愛感情とまでは言い難い気持ちのCIに、つきあい方のスキルを教えるのは早計であると考えた。やがて、CIは後輩やネット上の友人にZ君について相談するようになったが、それは、普通的女子学生が自然に友人と共有している事柄の一つ、“コイバナ(恋の話)”であり、CIは、まさにそれを自然に体験しているのだと思われた。

### 3. インターネットという仮想世界でのつきあい

HFPDDの人がコンピューターやゲームに造詣が深いことは知られているが、CIもパソコンに精通しインターネット・ゲームを作成する一人だった(中島,2003,2005)。しかしCIの場合、「自閉的ファンタジー」が「オタク的な興味」、「趣味という形に洗練されたもの」(杉山,1996)という印象は受けなかった。CIが持参したネット上の友人とのメール内容やチャット記録(#51,53,58)には、大学生という今の時間を生きる等身大のCIの思いが伝わってくるような言葉が溢れていた。また、現実世界では困難な障害や家族についての心情吐露が、友人への「共感」(#53)として書かれており、現実世界でASとして生きるCIの孤独な内奥を披瀝していた。

一般的には、インターネット上の仮想世界での関係を現実世界での関係と全く同じ次元で扱うことは出来ないだろう。しかし、現実世界でも日々迷路を模索しているのかもしれないHFPDDの青年にとってはどうだろうか。彼らにとってはどちらの世界に在ろうと、そこに在ること自体が迷宮体験であり、孤憤の謎解きに満ちているのではないだろうか。辻井(1996)は、彼らが「自閉的ファンタジー」の中で生き生きと反復的体験をし、現実世界と距離が取り難いその「リアルさ自体が特徴的」であると指摘する。そうすると、ディスプレイの中で繰り広げられる仮想世界も、彼らにとっては一つの現実といえるのかもしれない。彼ら固有の世界観では、仮想世界と現実世界での体験は、同一とまでいえずともそう変わるものではないのかもしれない。心理学的立場からは、仮想世界と現実世界との区別が出来ること、切り替えられることが重要で、両方の世界を行き交い出来る心の自由度がどれくらいあるのかという点に着目すべきだろう。本事例のCIにとって仮想世界でのつきあいは、「知り合いを見つけ、共通の思いを語り、助言を受けられる機会」(Attwood,1998)であり、コミュニケーション空間としての有用性が大きかったのではないかと考えられる。

## V おわりに

青年期のHFPDDの学生生活において、友人関係は欠かすことの出来ないものであり、Coが決して与えることの出来ないものである。社会性の障害が社会的な関わりでしか治せない(杉山ら,1999)のであれば、Coは彼らの友人関係について把握し、可能な限り後方支援していくことも責務であろう。

本稿では、友人関係がHFPDDの学生や学生相談にとってどのような意味を成すのかを考察した。それは筆者がCIに関連づけて、このたび与えた意味である。従って、また違う意味もあると、我々一人ひとりが考え始めたとき、このたびの意味は、更に、深く如何様にも広がる可能性をもつものである。言うまでもなく、HFPDD、ASといえどそれで全てわかってしまったような気になることには憂慮せねばならない。筆者は、丹念な事例研究を積み重ねて思考していく、慎重かつ冷静な姿勢がHFPDDの学生や彼らを支援する学生相談にとって最も緊要であることを信じて疑わない。

※) 不適切行動とされる、身体を前後に揺する自己刺激行動、反復的行動パターンのこと。

文献

- Attwood,Tony 1998 ASPERGER' S SYNDROME. A Guide for Parents and Professionals Jessica Kingsley Publishers Ltd. (富田真紀他訳 1999 ガイドブック アスペルガー症候群親と専門家のために. 東京書籍.)
- Frith,U 1991 Autism and Asperger syndrome. Cambridge University Press (マーガレット・デューイ 6. アスペルガー症候群とともに生きる 317-360 富田真紀訳 1996 自閉症とアスペルガー症候群. 東京書籍.)
- 石坂好樹 1999 アスペルガー症候群の症状の特異性についての精神病理. 精神科治療学,14(1), 39-46.
- Howlin,Patricia 1997 AUTISM : PREPARING FOR ADULTHOOD. Routledge. (久保絃章他訳 2000 自閉症 成人期にむけての準備. ぶどう社.)
- 神野秀雄 1987 自閉児の発達と言語. 聴覚言語障害,16 (3),91-97.
- 加藤哲文, 井上雅彦, 三好紀幸 1991 ゲーム指導を通した自閉症児のルール理解の促進. 特殊教育学研究, 29(2), 1-13.
- 小林隆児, 村田豊久 1990 201例の自閉症児追跡調査からみた青年期・成人期自閉症の問題. 発達の心理学と医学, 1(4),523-537.
- 村瀬学 1984 子ども体験.大和書房.
- 中島暢美 2003 高機能広汎性発達障害の学生に対する学内支援活動—アスペルガー障害の学生の一事例より—, 学生相談研究,24(2),129-137.
- 中島暢美 2005 高機能広汎性発達障害の学生に対する学生相談室の支援活動—アスペルガー障害の学生に対する教育的面接過程—,学生相談研究,25(3),224-236.
- 中島暢美 2006 就職活動ができない男子学生への壺イメージ療法についての一考察—トラウマの治癒—日本心理臨床学研究,24(2),166-176.
- 岡田敬司 2004 「自律」の復権—教育的かわりと自律を育む共同体—. ミネルヴァ書房.
- 杉山登志郎 1992 自閉症の内的世界. 精神医学,34(6),570-584.
- 杉山登志郎 1995 正常知能広汎性発達障害と精神科の問題. 発達障害研究,17(2),117-124.
- 杉山登志郎 1996 自閉性障害への治療. 本城秀次編,今日の児童精神科治療.金剛出版62-77.
- 杉山登志郎・辻井正次 1999 高機能広汎性発達障害—アスペルガー症候群と高機能自閉症—. ブレーン出版.
- 辻井正次 1996 自閉症児者の「こころ」を自閉症児者自身が探し求める場—高機能広汎性発達障害(高機能自閉症・アスペルガー症候群)への心理療法的接近から—. Imago,7 (11), 109-121.
- Willams,Dona 1992 Nobody nowhere.Times Books. (河野万里子訳1993自閉症だったわたしへ.新潮社.)

## Abstract

This paper is a continuing report with regard to support activities in the campus counseling services for students with High-Functioning Pervasive Developmental Disorder. By focusing on friendship aspects in the individual counseling sessions with a student with Asperger Syndrome, the author examined the effects of the relationship of the student on both herself and counselor in counseling sessions. The following conclusions can be reached: (1) friendships develop through more prominent in basic interpersonal relationships; (3) virtual friendships are also developed by chat and e-mail; and (4) it is important to provide back-up support for them through student counseling.

Key word : High-Functioning Pervasive Developmental Disorder,  
Asperger Syndrome, student counseling, friendship

## 付記

本稿は第23回日本学生相談学会で発表した事例である（日本学生相談学会大会発表論文集, 2005, 5, p69）。本事例についてご助言を賜りました西神戸医療センターの高宮静男先生に感謝致します。